

福島県只見川中・下流域における鳥追い行事の地域的特色

— 雪室の役割を中心に —

後 藤 麻衣子

I. はじめに

- (1) 研究の目的
- (2) 研究の方法

II. 小正月の行事としての鳥追い行事と雪室

- (1) 小正月の行事としての鳥追い行事
- (2) 雪室の概観

III. 対立競争が見られる鳥追い行事と雪室

- (1) 集落内を上と下に分かれて争う鳥追い行事
- (2) 上と下に分かれて争う鳥追い行事の特徴
- (3) 近隣の集落と争う鳥追い行事
- (4) 近隣の集落と争う鳥追い行事の特徴
- (5) 雪室の役割
- (6) 鳥追い行事の中に見られる対立競争

IV. おわりに

I. はじめに

(1) 研究の目的

人文地理学と民俗学の両視点から地域性研究に取り組んだのが千葉徳爾¹⁾である。千葉は民俗事象の地域差が生じる要因を考察し、集落との関連性を追究している。山口弥一郎は、集落の内部構成、生産機能、生活機構の解明の必要性を指摘しており、信仰などは経済的裏付けがあって成立すると述べている²⁾。山口は集落の各要素が他の要素とどの

ように関連して一つの集落を形成するか、東北地方を中心に研究を進めてきた。

このように地理学では集落の地域的特色と民俗事象の関連性を明らかにする視点が示されているが、鳥追い行事やその中で作製される雪室についての従来の研究には、そのような視点が見られなかった。従来の雪室研究は、地域的には秋田県³⁾と新潟県⁴⁾の一部に限定され、佐川良視⁵⁾や宮崎進⁶⁾のように、カマクラの語源⁷⁾を対象とした研究が中心だった。そこで本稿では、集落の自然条件や社会条件から鳥追い行事や雪室を考察し、その地域的特色を明らかにすることを目的としたい。

研究対象地域は福島県只見川中・下流域とした。この地域については既存研究が無い⁸⁾だけでなく、集落の「上と下」や近隣の集落と争う鳥追い行事が行われている地域だったからである。また、対象とした時代は昭和初期である。この時期を選定したのは次の3つの理由による。

①昭和初期には集落の様子を詳細に記した『郷土誌⁹⁾』が小学校の校区単位に同項目で作成されており、集落ごとの比較が可能である。

②第2次世界大戦後、雪室はカマクラと呼ばれるようになり、名称だけでなく、外形、利用形態の点で大きな変化を遂げた。

キーワード：雪室、鳥追い行事、対立競争、地域性

そのため、現在作製されているカマクラの前段階を知るためには、昭和初期の雪室研究が必要である。

③筆者が実施したアンケート調査及び聞き取り調査の結果¹⁰⁾から昭和初期には次の三形態の雪室が存在したことが明らかになった。第一は狩猟時に設営される雪室、第二は子供の遊び場として利用される雪室、第三は小正月の行事の中で作製される雪室である。この三形態の雪室が共存した昭和初期は重要な時期であると考えられる¹¹⁾。

(2) 研究の方法

研究の方法は、まず、只見川中・下流域、全52集落を対象に、明治末期から昭和初期生まれの古老を対象としたアンケート調査を行った。アンケート調査では雪室の有無、名称、外形、利用形態に関して選択式の方法をとった。その結果、36集落に雪室が作製され、鳥追い行事の時に作製される雪室が存在する集落25カ所、子供の遊び場として利用される雪室16カ所であった。前者の雪室の中で「集落内の上と下で争う地域」は4カ所、「近隣の集落で争う地域」は14カ所であった。さらに、これらの昭和初期に作製された雪室に関して聞き取り調査を実施した。

その結果、鳥追い行事は対立競争のかたちをとって行われる場合が多く、その形態は①同じ集落を上と下に分けて争う形態、②近隣の集落と争う形態に分類できることが明らかになった。そこで本稿では、この2つの形態に分けて雪室の特徴を明らかにする。そして、集落内の上と下で争う形態が見られる鳥追い行事と近隣の集落と争う鳥追い行事を比較し、その相違点と要因について考察する。また鳥追い行事に対立競争が表れる要因についても追究していくことにする。

II. 小正月の行事としての鳥追い行事と雪室

(1) 小正月の行事としての鳥追い行事

鳥追い行事は、予祝的な農耕儀礼を行う。特に只見川中・下流域の9割以上の家¹²⁾が、農業を生業としていた昭和初期は豊作祈願の行事が重要であった。聞き取り調査によると、雪中田植えとだんごさが田植えに当り、鳥追いが害鳥駆除であり、だんごもぎが稲刈りに該当し、農業の一年の流れを模擬的に行っていた。鳥追いは田畑につく害鳥を追い払うことを目的として農業の一連の作業を模擬的に行う小正月行事の中では欠かすことができない重要な行事であった。

これまで実施した調査の結果、鳥追い行事は四つに分類できる。

- ①歌を歌いながら集落をまわる。
- ②集落の境まで行き、歌を歌う。
- ③集落を二分、又は近隣の集落と歌い争う。
- ④雪室の上で歌ったり、雪室の側で歌ったりする。

この中で雪室は④の場合、鳥追い行事の祭場として中心的な場となる。一方、①から③においては行事の前に入って飲食する小屋として雪室を利用している。これらの雪室は行事の前に籠るために必要な場所であった。④は檜型、①から③は小屋型、あるいは雪穴型が多い¹³⁾。また雪で集落をまわれない地域もあった。そういった地域では雪で台を作り、そこに登って鳥追いを行った。すなわち、雪室は鳥追いをする場所や籠るための場所として利用するために鳥追い行事の中で作製されていたのである。それは雪の持つ加工しやすい性質から活用されたのではないかと推測される。

(2) 雪室の概観

雪室¹⁴⁾とは雪山に穴を開けて中に人が入れるものや雪で囲みを作り、上に木を渡し、筵などで屋根をかけたものを言う。さらに雪で作った台も雪室に含まれる¹⁵⁾。

筆者は広い地域での雪室の特徴を知るため、2000年から2005年にかけて、昭和初期の

雪室の有無、名称、外形、利用形態について調査を実施した。対象地域は青森県、秋田県、岩手県、山形県、宮城県、福島県、新潟県、栃木県、長野県、富山県、石川県、福井県で、400の市町村について行った。なお、北海道にも雪室は存在するが、北海道は明治時代以後、本州から移住してきた人が雪室を形成していったという特殊な事情から今回の調査には含めなかった。

その結果150市町村に雪室が存在し、狩猟時に設営する雪室、鳥追い行事の時に作製される雪室、子供の遊び場として利用される雪室の三形態の雪室が存在することが判明した。この調査で、只見川流域においても三形態の雪室が作られていたことが明らかになった。只見川では、上流域に狩猟時に設営される雪室、中・下流域に鳥追い行事の時に作られる雪室、そして全流域に子供の遊び場として作る雪室が作製されていた。アンケート調査の結果をもとに、現地調査を150カ所実施した。その結果、名称、外形、利用形態に関して次のようなことが判明した。

雪室は地域によって名称がかなり異なり、鳥追い小屋、雪穴、ドウなど多数の名称が存在することが判明した。図1に示したように雪室は外形上①雪城型②小屋型③雪穴型④櫓型⑤櫓型（中に入れるもの）⑥樽型の

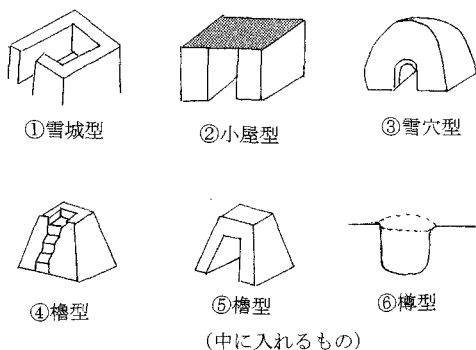


図1 雪室の形

〔出典〕稲雄次『カマクラとボンテン』
秋田文化出版社 1990、及び現地での聞き取り調査などにより作成

六種類の形に分類できる。

また、雪室の利用形態は時代によって変化が見られる。江戸時代では武士が男子の祝儀を目的とし、左義長の時に神を祀る場、祭場として雪室を利用し、農民は鳥追い行事の前に籠るために雪室の中で過ごした¹⁶⁾。その他、狩人が獲物から身を隠すために設営する雪室も存在した¹⁷⁾。明治時代になると武士社会の崩壊により、武士が作製する雪室は姿を消した。大正末期から昭和初期にかけての雪室は前述したように三形態存在した。そして第二次世界大戦後、ラジオ、テレビなどの影響により、横手のカマクラが雪国全域に伝播し、観光資源として利用されるようになった。

また、地域的な違いも見られた。例えば、福島県野尻川流域においては、上流域では狩猟時に雪室を設営し、特に狩猟期間中に泊まるために作る雪穴型の雪室が多く作られていた。中・下流域になると、鳥追い行事の時に小屋型の雪室を作製していた。子供の遊び場としての雪室は上流にいくほど作られる割合が大きかった。このように、川の上、中、下流域という集落立地や自然条件も雪室の地域差を生み出す原因の一つであると考えられる。そして、自然環境に影響を受けた生業形態や社会組織、歴史的背景なども要因として挙げられよう。

雪室は地域ごとの自然環境や、生業形態などから影響を受けるとともに、社会の変動によって変化をしてきた。雪室の地域性や変遷を辿り、その要因を解明することは雪国の文化と環境との関連を示す上でも重要であり、そこに雪室研究の意義があると思われる。

Ⅲ. 対立競争が見られる鳥追い行事と雪室

(1) 集落内を上と下に分けて争う鳥追い行事

只見川流域では集落を二分し、上流部に位置する地域を上と称し、一方下流部に位置する地域を下と呼んでいる。それらの集落の中

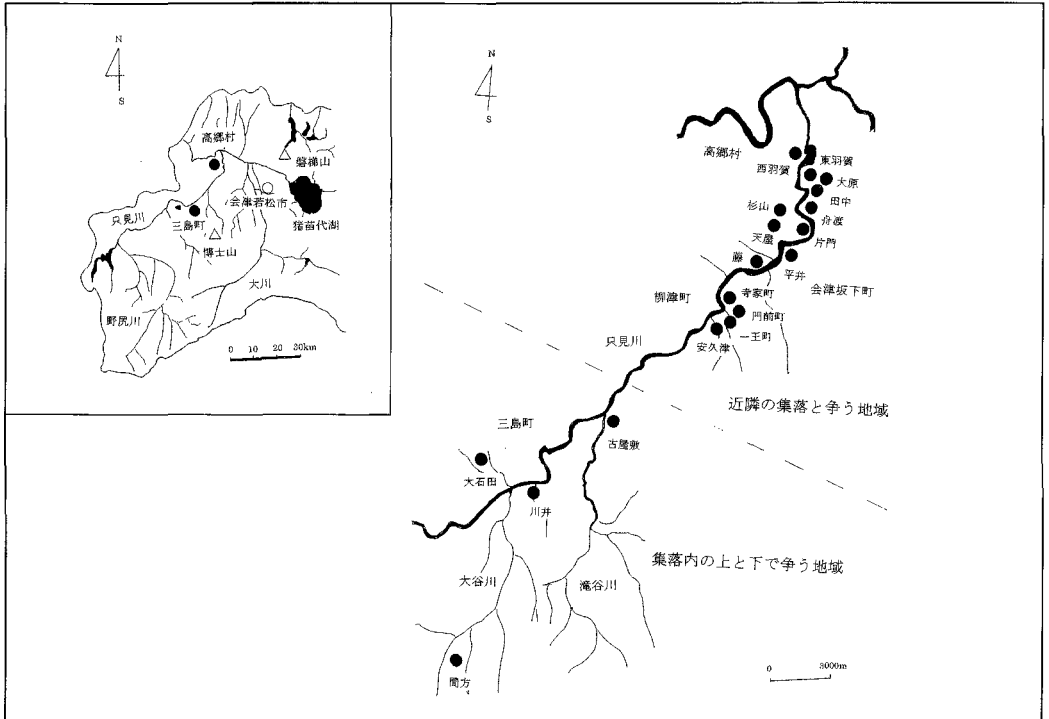


図2 対立競争が見られる集落
(現地での聞き取り調査などにより作成)

には、雪室も上と下それぞれに作製される集落が存在した。上と下に分かれて争う鳥追い行事及びその中で作製される雪室についての調査結果を整理したものが表1である。

鳥追いの行事形態と行事の中での雪室の扱われ方を分析してみると次のようなことが言える。

事例1の三島町間方¹⁸⁾ではドウ、シロという雪室が上と下のそれぞれで作製されていた。ドウは台上の部分を指し、シロは下の穴のことを言う。台上には周囲に竹と柴を植え、真中に松の木を1本植えた。旧暦1月14日、シロの中で飲食した。早朝、上と下それぞれの子供がドウに登り、相手の悪口を含む歌を歌った。さらに相手のドウにまで行った。ドウの上に挿してある松の木を倒した方が勝ちとされていたため、互いの松の木を倒されないように攻められる側は一晚中守つ

た。以上のように、雪室の上で悪口を含む歌を歌って争うという形態とさらに雪室の上にある棒を倒すという相手の雪室を攻める行為も行っている。行事内容から雪室は行事の陣地であるとともに、攻めるものであり勝敗を示す対象である。



図3 三島町間方の雪室
(2003年2月8日撮影)

表1 集落内の上と下で争う地域に見られる鳥追い行事と雪室（昭和初期）

番号	集落	名称	形	利用形態	鳥追いの内容	鳥追い歌	
1	間方	上	シロ	櫓型（中に入れるもの）	中で飲食をする。	シロの中で飲食した後、ドウの上に登り、相手方の悪口を含む鳥追い歌を歌った。相手方のドウまで行き、ドウの上にある松を倒した（倒した方が勝ちである。）	（ドウの上で歌う歌） 「今日はこの鳥追いだ。長者様の鳥追いだ。鳥はどこい止まった。貸満崎に止まった。何持って追いましょう。柴の木の木持って追いましょう。ヤーイ ヤーイ」 「上（下）方の子奴等わ 大小差して足袋はいて 歩くじゅうに上（下）方の子奴等わ 餅の歳もといしねしで 棚の下巡って 猫のヘドめっけいで 納豆だしと思って おげらだり 棒だり 湯漬け マンマイかっこんで ノッチャパッキリ くつついだー ヤーイ ヤー」
			ドウ		台上で鳥追い歌を歌う。攻撃される対象物		
		下	シロ	櫓型（中に入れるもの）	中で飲食をする。		
			ドウ		台上で鳥追い歌を歌う。攻撃される対象物		
2	大石田	上	カザアナ	雪穴型又は小屋型	中で飲食をする。	（ドウの上で歌う歌） 「今日はこの鳥追いだ 天神様の鳥追いだ イヤーホイ イヤーホイ」	（上と下の境で歌う歌） 「下（上）の方のこめらは 行儀の悪い こめらで たかへら（稲場のところ）登って うさんくっそ（うさぎの糞）めっけて（みつけて）納豆だと思って ゆうづけまんま（お茶づけ）とまぜて食ったぞ。ヤーホイ ヤーホイ」
			ドウ	櫓型	台上で鳥追い歌を歌う。		
		下	カザアナ	雪穴型又は小屋型	中で飲食をする。		
			ドウ	櫓型	台上で鳥追い歌を歌う。		
3	川井	上	シロ	雪城型	鳥追いの陣地	（シロの前で歌う歌） 「今日はこの鳥追いだ。日光町の法印様の鳥追いだ。ヤーホイ ソヤーホイ」「さらばとって喰いましょう ヤーホイ ソヤーホイ」 「上（下）の方のこめらは卑しいこめらで うさんくっそ めけってゆうづけまんまだと思ってかっこんだ」	
		下	シロ	雪城型	鳥追いの陣地		
4	古屋敷	上	カザアナ	雪穴型	中で飲食をする。	（集落を回る時に歌う歌） 「今日はこの鳥追いだ。雀の頭八つに割って こざるこさ詰め込んで 佐渡島さ追いあげろ。ヤーホイ ヤーホイ」	
		下	カザアナ	雪穴型	中で飲食をする。		

〔出所〕 現地での聞き取り調査により作成



図4 三島町大石田集落
(2003年2月26日撮影)

事例2の大石田では上と下の境で悪口を含む歌を歌っていた。そこではカザアナとドウと称される二種類の雪室が作製されていた。カザアナは行事の前に籠る場所として、ドウは鳥追い行事を遂行する場所として利用されていた。

事例3の川井ではシロと呼ばれる雪室を上と下の境にそれぞれが一つずつ作り、向かい合わせて作った。中には歳徳大明神を祀った。鳥追いはシロから出て上と下の子供がそれぞれ向かい合って横一列に並び、鳥追い歌を歌いながら、足で雪を蹴り、相手にかけた。川井では、上と下の境で悪口を含む歌を歌い、雪を蹴って争う形態をとっていた。この集落で作製される雪室は上と下それぞれの鳥追い行事における陣地としての役割を果たしていたのである。

事例4の柳津町古屋敷では集落の中を歌いながら歩いた後、上と下の追いくら（お互いに鳥を追う）をした。古屋敷で実施されていた鳥追いは上と下の境で互いの悪口を含む歌を歌って鳥を追い払うという内容であった。ここの雪室はその行事が開始される前に籠る場として扱われていたのである。

(2) 上と下に分かれて争う鳥追い行事の特徴

集落内を上と下に二分し争う鳥追い行事を行う事例1から4に共通することは、上と下

の子供が上、下の境に行き、互いに歌を歌って争うという形をとっていることである。これらの地域で鳥追いの時に歌われる歌は「〇〇の鳥追いだ…」と人名、場所を指す歌と「上（下）のこめらは…以下悪口を言う」相手に向かって悪口を言う歌の二種類あり、争う場では後者が歌われる。雪室について、事例1から4に共通することは、上と下それぞれで作られており、行事が開始されるまでに待機する場とされている点である。また事例3では雪室に神を祀るという祭壇としても用いている。さらに事例1と3では行事の陣地とし、1では雪室の上に挿してある松の木を倒すという攻める行為が見られ、雪室が勝敗を示す対象となっている。

(3) 近隣の集落と争う鳥追い行事

只見川流域では表1に見られるように、集落を上と下に二分して行う地域と、鳥追い行事と雪室の利用形態からみて、表2に見られるように、近隣の集落と争う地域がある。

近隣の集落と争う鳥追いの行事の内容と雪室の利用形態には次のような特色が見られる。

事例5の安久津は集落の境に行って一王町の悪口を含む歌を歌った。一王町では行事の前に雪室の中に祀っている水神様を参拝した。旧暦1月14日の夜、男子は鳥追い歌を歌いながら、集落内を歌って回った。集落の境まで行くと安久津の子供と追いくらをした。一王町、安久津では集落の境で相手の集落の悪口を含む歌を歌って争っていた。

事例6の門前町では暗くなると、子供が鳥追い歌を歌いながら集落を回り、寺家町に行っては悪口を含む鳥追い歌を歌って掛け合いした。また数人の子供は鳥追いには行かず、雪室の中で待機していた。他の集落の子供が来ると雪室を挟んで、雪合戦をした。一方、寺家町では虚空蔵尊の近くに砦を作った。夕方になると男子が集まり、寺家町内を

表2 近隣の集落と争う地域の鳥追い行事と雪室(昭和初期)

番号	集落	名称	形	利用形態	鳥追いの内容	鳥追い歌
5	安久津	不明	小屋型	中で飲食する。	集落を回った後、境まで行って、相手方の悪口を含む鳥追い歌を歌う。	「雀の頭八つに割って 小俵さ詰め込んで 佐渡島にヤーホイ」「安久津の鳥は卑しい鳥で 小俵さ詰め込んで 佐渡島へヤーホイ」
	一王町	カザアナ	雪穴型	神を祀る。中で飲食する。		「雀の頭八つに割って 小俵さ詰め込んで 佐渡ヶ島さ ヤーホイ」の歌を歌って集落を廻り、集落の境に行くと「一王町の鳥は 卑しい鳥で 小俵さ詰め込んで 佐渡ヶ島さ ヤーホイ」
6	門前町	カコイ又はトリデ	雪城型	中で飲食する。	鳥追い歌を歌いながら、集落を回り、相手方の雪室を攻撃する。	「今日はどこ鳥追いだ。長者様の鳥追いだ。雀の頭八つに割って 小俵に詰めて 佐渡島に ヤーホイ ヤーホイ」「寺家町の鳥は 卑しい鳥で 雀の頭八つに割って 小俵に詰めて 佐渡島に ヤーホイ ヤーホイ」
	寺家町	トリデ	小屋型	鳥追いの際に攻撃される対象物。		「雀の頭八つに割って 戸棚に詰めて佐渡島にヤーホイ」
7	藤	ドウモン	雪穴型	中で飲食する。	相手方の集落が見得る場所まで行き、川を挟んで鳥追い歌を歌う。	「向かいの鳥は 卑しい鳥で 稲の穂さ くつついたり 粟の穂さ くつついたり あっつぱっくり つつついたり こっつぱっくり つつついたり いやしい鳥で やっほう やっほう」
	平井	不明	不明	不明。		
8	片門	ガマ	雪穴型	中で飲食する。	橋の上で、お互いの悪口を含む歌を歌う。	「船渡の鳥は卑しい鳥でそんな鳥は追ばらい」
	舟渡	なし	なし	なし。		「ムケエの鳥は いい足の鳥で ナットバサ クツツイテ オツテモ オツテモ ハナンニ」
9	天屋	鳥追い小屋	雪穴型	中で飲食する。	集落の境まで行き、相手方の悪口を含む歌を歌う。	「ヤーホ、ヤーホ 杉山の鳥は卑しい鳥で 一升飯くらって なおかつ足りなくて瀬戸くず食べてひっかけて死んじゃった。ヤーホ、ヤーホ」
	杉山	カザアナ	小屋型	中で飲食する。		「天屋の鳥は卑しい鳥で 頭8つにさいて川さながすぞ」
10	田中	ドウモン	雪穴型	中で飲食する。鳥追い行事の拠点。	集落の境で、お互いの悪口を含む歌を歌う。	「大原(田中)の鳥は、卑しい鳥で、棚の下くぐって餅かけふんづけて 追っても追っても放んにえーヤーホー」
	大原	なし	なし	なし。		
11	東羽賀	不明	雪穴型	中で飲食する。	川を挟んで鳥追い歌を歌う。	「今日はどこ鳥追いだ。長者様の鳥追いだ。さらばでておきましょう。雀の頭八つに割って只見川さ投げろ」
	西羽賀	なし	なし	なし。		

〔出所〕 現地での聞き取り調査により作成

歌いながらまわり、雪室に行き、中に入って相手方の雪室を攻撃する話し合いをし、相手の雪室を攻撃した。門前町、寺家町では集落の境で歌を歌い争うという形態をとっていた。さらに互いの雪室を攻めて壊すという行為も行ってた。この二集落の雪室は鳥追いの陣地とされ、互いに攻め落とされる対象にもなっていた。

事例7の藤では鳥追いの前に雪室に入って飲食し、遊んだ後、川を挟んだ相手の集落(平井)が見えるところまで行き、平井の方に向かって悪口を含む鳥追い歌を歌った。鳥

追いが終わった後はドウモンに入って遊んだ。藤と平井では川を挟んで悪口を含む歌を歌うという鳥追いを行っていた。その行事の中では雪室は飲食する場として使用されていた。

事例8の片門ではガマと呼ばれる雪室を作った。旧暦1月14日、ガマの中に入って鳥追いが始まるのを待った。鳥追いは片門と舟渡をつなぐ橋の上で行われた。男子は外に出て橋まで行き、鳥追い歌を歌い、舟渡も歌い返した。鳥追いが終わるとガマへ帰り、甘酒や餅、菓子等を食べた。片門、舟渡では川を

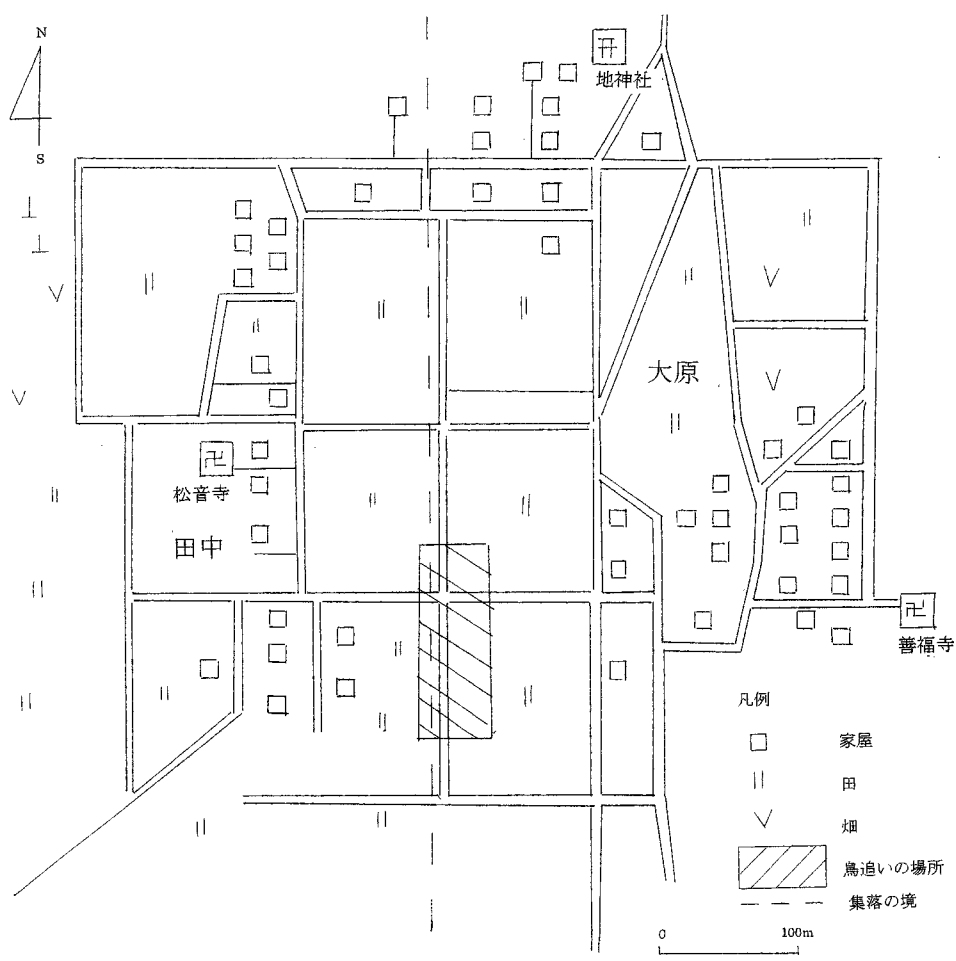


図5 高郷村田中と大原の集落図
(現地での聞き取りなどにより作成)

挟み、橋の上で鳥追いを行っていた。ここの雪室は飲食する場となっていた。

事例9の天屋では鳥追い小屋から男子が出て、杉山の方に向かって鳥追い歌を歌った。鳥追いが終わったら、鳥追い小屋へ帰って行き、中で飲食した。杉山では子供がカザアナと呼ばれる小屋型の雪室を作った。旧1月14日の夕方、カザアナの中に集まり、甘酒や餅を飲食して鳥追いが始まるまで待機した。3、4人で鳥追いに出かけ、集落境まで行き、一列に並んで天屋の方を向いて悪口を含む鳥追い歌った。そして、次の組と交代し、歌い終わった組は、カザアナの中に帰り、飲食した。天屋と杉山では相手側の集落に向かって悪口を含む歌を歌うという行事内容であった。雪室は行事の前後に飲食する場とされていた。

事例10の田中では鳥追いをする前にドウモンと呼ばれる雪室を作り、そこを鳥追いの陣地とした。旧暦1月14日の早朝、向かい側の集落である大原と鳥追いをした。田中と大原では田を挟んで集落の境に位置する神社を中心として悪口を含む歌を歌い、雪玉を投げて争った。雪室は鳥追いの時の待機場所として利用されていた。

事例11の東羽賀では旧暦1月14日に鳥追いをした。鳥追いをする前に雪室を作って中で飲食したが、何と呼んでいたかは話者の記憶に無い。昼頃、川を挟んで西羽賀と鳥追いをした。川沿いに並び、西羽賀に向かって歌った。適当に歌を作って相手の悪口を言い合った。ある程度、怒鳴った後、休憩をしに雪室に帰ってきた。中で餅や甘酒等を飲食し、また鳥追いをしに川岸に戻った。何回かやった後、雪室の中で飲食し、夕方家に帰った。東羽賀、西羽賀では川を挟んで相手側の悪口を含む歌を歌って争うという形をとっていた。ここでは、雪室は飲食する場とされていた。

(4) 近隣の集落と争う鳥追い行事の特徴

近隣の集落と争う鳥追い行事である事例5～11に言えることは、互いの集落の悪口を含む歌を歌って争う形をとっていることである。集落の境で歌い争っているが、事例7、8、11では川を挟んで争っている。ここの雪室はすべて飲食する場として扱われているが、事例5のように雪室を神を祀るという祭壇のように利用している集落もあった。さらに事例6のように相手方の雪室を攻め落とす行為をしている集落も存在した。事例6のような行為はどちらが勝ったか、明確に示すことが出来る。このような雪室は勝敗を決める対象物として利用されていた。

(5) 雪室の役割の違いとその要因

只見川中・下流域には対立競争は見られないが鳥追い行事の中で雪室を作る地域がある。対立競争が見られない地域の鳥追い行事は①集落内を回って歌う。②集落の境まで行って歌う。③雪室の上やその周囲で歌うという形態をとっている。一方、これまで見てきた事例1～11のように対立競争が見られる地域の鳥追い行事には①～③のようなことも行われるが、集落境でお互い向き合って、悪口を含む歌を歌っている。その点が、対立競争が見られる鳥追い行事の特色である。

そういった中での雪室の存在意義は行事の中での利用方法の分析を通して見えてくる。事例1～11までの雪室の利用形態を整理するとa 飲食する場、b 鳥追い歌を歌う場、c 行事の勝敗を示す対象物とされていることである。対立競争が見られない地域の鳥追い行事の中で作製される雪室ではaやbの形態をとっており、cは見られない。以上の点からcは対立行事が見られる鳥追い行事の中でしか使用されない利用形態である。したがって、対立競争が見られる地域の雪室は攻めて壊され、あるいは雪室の上に挿してある棒を倒すといった行事の勝敗を示す対象とされていることが最大の特徴である。

さらに雪室の名称、外形、利用形態を検討していくと、上と下で争う地域で作製される雪室と近隣の集落で争う地域の違いが明確に表れてくる。集落内の上と下で争う地域では、上、下それぞれで作製される雪室の名称は全く同じ名称であり、外形も同様、歌も「〇〇のこめらは…」と〇〇の部分を上のは下をあて、下のは上にあてており、それ以外は全く同じ歌詞である。例えば、事例1の間方では上、下それぞれドウ、シロと呼ばれる雪室を作っており、中に入って雪室の上に挿してある棒を倒されないように守った。鳥追い歌の歌詞も前述したように「上(下)方の子奴等わ…」とあり、上と下で全く同じ歌詞を歌っていたのである。

一方、近隣の集落で争う地域の場合は、雪室の名称も外形も利用形態も違っている。例えば、事例6を挙げる。門前町と寺家町で鳥追いを行って争うが、門前町ではカコイ又はトリデと呼ばれる雪城型の雪室を作り、その中で暖をとり、敵がくるのを待っていた。一方、寺家町では砦と呼ばれる雪穴型の雪室を作り、その中で相手の雪室を壊す相談をしたという。さらに歌詞の点から見ても門前町と寺家町では違う歌詞である。

このように、上と下で争う地域では上と下で全く同じ雪室が作られ、同じような行為を行っていた。それに対して、近隣の集落と争う地域は、それぞれの集落で異なった雪室を作り、利用方法も違っていたのである。

そこで、上と下のそれぞれの地域で全く同じ名称、外形の雪室を作製し、上と下で同様の行為が行われる理由について考察する。

まず、自然条件については次のようなことが考えられる。上と下で争う地域は近隣の集落と争う地域よりも上流部に位置している。そのため、隣の集落までの距離や積雪量などによる自然環境が異なると考えられる。上と下で争う地域の隣の集落までの距離¹⁹⁾を示すと約2、3 km離れている。一方、近

隣の集落と争う地域では約500m²⁰⁾と隣の集落が近くに位置することが多い。したがって、上と下で争う地域の方が、近隣の集落と争う地域よりも隣の集落までの距離が遠いことがわかる。

また行事は冬季に実施されるため、積雪量を比べてみると、上と下で争う地域の降雪累計は1998年度で704cm、2001年度で526cmである。そして最高積雪値は1998年度で120cm(2月15日)、2001年で130cm(1月9日、1月10日)²¹⁾である。近隣の集落と争う地域の降雪累計は1998年で221.5cm、2001年度は427cm、最高積雪値は、1998年度で51cm(2月15日、2月16日)、2001年度は107cm(1月9日、1月10日)²²⁾である。このように積雪量は上と下で争う地域の方がかなり多く、

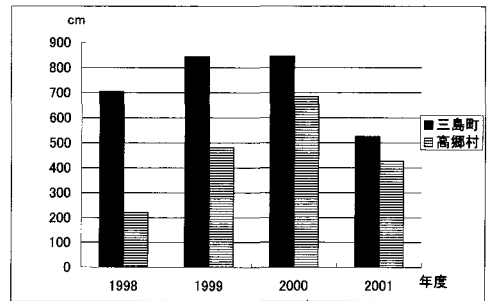


図6 三島町、高郷村の年降雪量
(三島町、高郷村役場資料により作成)

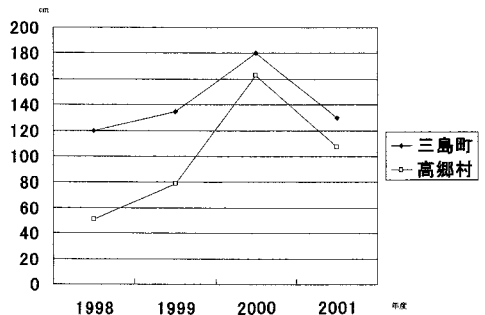


図7 三島町、高郷村の最高積雪量
(三島町、高郷村役場資料により作成)

雪が多いため、隣の集落まで行くのが困難であると考えられる。

以上のように、上と下で争う地域は近隣の集落と争う地域よりも、雪が多く隣の集落までの距離が遠い。そのため、隣の集落に行くのではなく、集落内を二分して争う形態をとっていると考えられる。

次に社会条件については次のようなことが考えられる。上と下で争う地域は鳥追い行事に限らず、行政単位も二分されていた。例えば大石田では集落の区長などの役職は上と下で交代して行っている。さらに遡って近世においても現在と同様に二分され、二人の名主が勤中していたという²³⁾。川井村では檜原山ノ内豊前守俊範領と横田山ノ内家直領に二分されていた²⁴⁾。上と下で争う地域は近隣の集落と争う地域と違って、日常生活においても二分されることが多く、常に相対立する構図をとっていた。

さらに、もう一つ考えられる要因として、集落内の同族関係が挙げられる。上流地域にいくほど、集落内の姓は限られてくる。近隣の集落と争う地域よりも上流地域に位置する上と下で争う地域では、上と下併せて集落内に二、三種類の姓にほぼ限定される。例えば、大石田では下に多い秦姓と上に多い飯塚姓に分かれる。また五十嵐姓は上と下の両方に見られるが、本来は姓が同じでも二つの一族に分かれる。下に位置する秦姓の方について、大石田に定着したのが上の飯塚である²⁵⁾。また古屋敷でも鈴木姓が先住していたところに小在家というところから田崎姓が移住してきたと言われている²⁶⁾。一方、近隣の集落と争う地域では、いくつもの姓が混ざっており、二手に分けることはできない。以上のことから、上と下で争う地域は上と下でそれぞれ違う一族であった。一つの集落を形成したが、行政単位や行事ではもとの一族に戻り、上と下で争ったのではないかと推測される。したがって、上と下で争う地域は、それ

ぞれ違った一族で構成されているため、二分されており、一方、近隣の集落と争う地域は多数の姓で形成されているため、二分することが出来ず、他の集落と争う形態をとったのではないかと考えられる。

(6) 鳥追い行事における対立競争の原因

最後に対立競争という行為がなぜ鳥追い行事の中で見られるのかという点に着目し、考察する。

只見川の上、中、下流域を比較すると上流域では鳥追い行事が全く行われていないか、あっても集団で行わず、玄関先で歌を歌うなど個人の行事としてであり、集落で行うことはしない。さらに雪室も鳥追い行事の中では作られない。一方、上と下で争うあるいは近隣の集落と争うなど集落単位で対立競争をするのは、下流地域に多く見られる。上流地域に残されている只見尋常小学校の『郷土誌』によると、耕地の一戸あたりの面積は田45畝10歩、畑69畝19歩であった。これに対し、下流部に残存している高郷第1小学校の『郷土誌』には5反515畝、畑8反906畝と下流地域の方が、かなり多く、上流地域の集落に農村物を移出していたと記されている。只見尋常小学校『郷土誌』によると、米、大豆、小豆、粟、蕎麦、甘藷、玉蜀黍、大根と記されている。一方、高郷第1小学校『郷土誌』では、米、麦、大豆、小豆、蕎麦、甘藷、馬鈴薯、蔬菜、麻、煙草、柿と農作物の種類が書かれている。また、上流部では、只見尋常小学校の『郷土誌』に「狩猟ヲ營」むとあり、特に只見町田子倉では、狩猟のような農業以外のものが生業であった。このように、この下流部の生業は農業である。農業は村全体で協力しあう面があり、結束力を高めていかなければならない。そのためには、他の集落と争う行為を通して、対抗心を芽生えさせ、集落内の結束力を高めていく必要があった。鈴木二郎は労働単位にも双分制が見られるこ

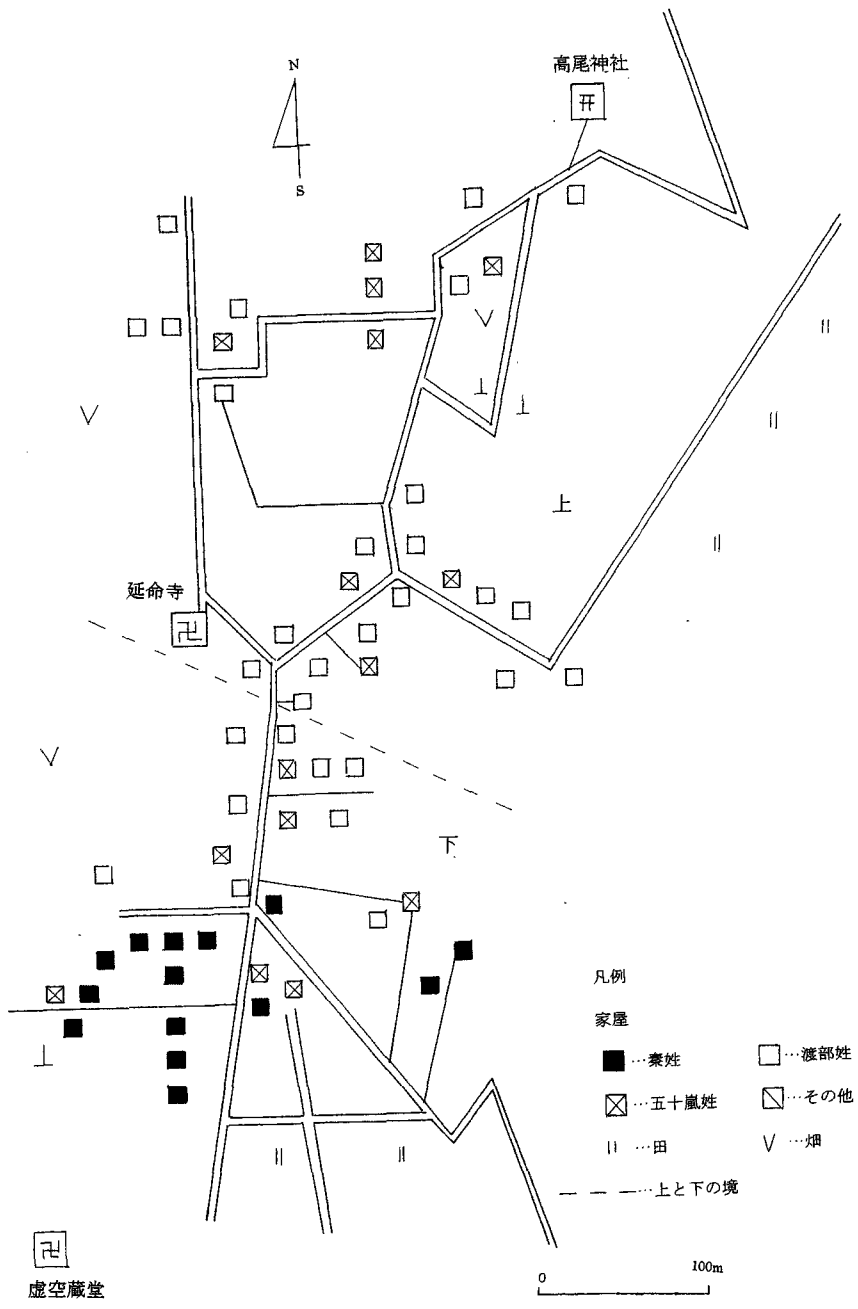


図8 三島町大石田の集落図
(現地での聞き取り調査などにより作成)

と²⁷⁾を指摘しており、対立という構図が労働にもある点から考えると対立競争という行為は生業にも関連することが分かる。下流域は前述したように、農業が生業であったため、農業に関する行事である鳥追いの中に顕著に表現されたのであろう。

IV. おわりに

本稿は、これまで注目されてこなかった対立競争が見られる鳥追い行事と雪室形態を研究対象として取り上げてきた。その中で、集落を上と下で争う形態と近隣の集落内と争う形態に分類し、鳥追いの行事内容や歌詞及び雪室の名称や外形、利用形態について検討してきた。

集落内の上と下で争う地域と近隣の集落と争う地域の鳥追いと雪室を比較すると、上と下で争う地域では、どちらも全く同じ名称及び形の雪室が作製され、利用方法も全く同じであった。それに対して、近隣の集落と争う地域の雪室は各集落で形態や名称、利用方法が異なっていた。

その要因として、まず挙げたのが自然条件である。上と下で分かれて争う地域は、近隣の集落と争う地域よりも上流域に位置し、隣集落までの距離があり、さらに積雪量も多く、隣集落まで行くのは困難であったため、集落を二分して争ったと推測した。

また、社会生活においても、上と下の対立が表れることであった。近隣の集落と争う地域と違って、上と下で争う地域は役職も上と下で分かれており、そのことが行事にも反映されたのではないかと結論に至った。上と下で分かれて争う地域は二集団に分かれやすいが、近隣の集落と争う地域は姓が多数であるため、二分することができず、他集落と争う形態をとっていたといえる。

また、対立競争が見られない地域と比較すると、対立競争が見られる地域の鳥追い行事は、集落境で互いに向き合い、悪口を含む歌

詞を歌って争う点が異なり、さらに雪室については、相手方の雪室を攻めて破壊し、あるいは相手側の雪室に挿してある棒を倒した方が勝つなど、雪室が鳥追い行事の勝敗を示す対象物となっていることが、明らかになった。

そして、鳥追い行事に対立競争という行為が行われる要因についても考察した。対立競争が見られる鳥追い行事は下流域に多く見られる。この下流域の生業は農業である。農業は集落内の結束力を高め、互いに助け合っていかなければならない面がある。特に水利に関しては、集落で共同で利用していた。そのため、行事の中で競争することによって、結束力を高めていくことが必要であった。下流域の最も重要なことは農業であったため、農業に関する行事である鳥追い行事の中に、対立競争という行為が見られるのではないかと考えられる。

以上、対立競争が見られる鳥追い行事や雪室の地域差が見られる要因を考察してきた。これまで、行政単位や労働単位、行事単位にも対立競争が見られることが指摘されてきたが、それがどのように行事に関わってきたか、また影響を与えたのかをさらに明確にしていくために、今後も行事自体だけを対象とせず、集落全体を視野に入れた調査、研究の継続が必要である。

(昭和女子大学)

〔付記〕

本稿は歴史地理学専攻である昭和女子大学田畑久夫先生及び民俗学専攻である渡辺伸夫先生のご指導のもとに作成致しました。また、後藤淑先生、大谷津早苗先生にご教示賜りました。尚、査読者の的確な校閲によって改めて論文の整理をすることができました。資料収集にあたり、多くの方々にお世話になりました。厚く御礼申しあげます。

〔注〕

- 1) 千葉徳爾『民俗と地域形成』, 風間書房, 1966.
- 2) 山口弥一郎「集落の発達と機能」『地理学概論』, 文化書房, 1966, 149~157頁。
- 3) 秋田市市内や横手, 角館, 六郷などが研究対象地域とされ, 佐川良視や宮崎進などによって, カマクラ語源を中心に研究が進められてきた。一方で, 薄葉篤蔵や長井陽のように横手の雪室の変遷に関する研究が行われてきた。
- 4) 渡辺富美雄等が新潟県にも雪室が存在することを示し, 外形の分類を行った(渡辺富美雄・松沢秀介・原田滋『新潟県における鳥追い歌 — その言語地理学 —』, 野島出版, 1974)。
- 5) 佐川は常陸の鳥追い歌と『出羽国秋田領風俗問状答』に記されている鳥追い歌を比較し, 歌詞に出てくる「鎌倉」に着目し, 鳥追い歌から起こったものである(佐川良視「鎌倉の発祥と語源」, 横手郷土史資料26, 1954, 10頁)と述べた。
- 6) 宮崎は, カマクラはカミクラが転訛したと主張した(宮崎進「かまくらの語源と歴史」, 出羽路4, 1961, 23頁)。
- 7) カマクラ語源は①カマド説②鎌倉権五郎説③鎌倉幕府説④水神様説⑤鳥追い小屋説⑥カミクラ説の六説ある(稲雄次「小正月行事の分析視点 — カマクラの構造 —」, 秋田民俗14, 1988, 47頁~50頁)。
- 8) 雪室の記載がある報告書は①会津民俗研究会・三島町文化財専門委員会編『会津御蔵入大石田の民俗』, 1995, ②会津坂下町史編さん委員会『会津坂下町史Ⅰ 民俗編』, 1994, ③高郷村史編さん委員会編『会津高郷村史Ⅲ 民俗編』, 2002であるが, 鳥追い行事のなかで作製されている, などと簡単に記されているだけで, 雪室をどのように使用したかは不明である。
- 9) 『郷土誌』とは, 明治44年と昭和7年に, 福島県全域で, 郷土の歴史や地理, 信仰, 習俗などを記録するように訓令が出され, 校区単位で作成されたものである(後藤麻衣子・田畑久夫「福島県訓令による会津地方の『郷土誌』に関する研究(第1報) — 福島県昭和村の『郷土誌』を事例として —」, 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要15, 2006, 17~29頁)。
- 10) 青森県, 秋田県, 岩手県, 宮城県, 山形県, 福島県, 新潟県, 長野県, 栃木県, 富山県, 石川県, 福井県における各市町村単位でアンケート調査を実施した。内容は, 雪室の有無, 名称, 外形, 利用形態である。アンケート調査の結果をもとに, 雪室が存在する地域の聞き取り調査を行った。
- 11) 大正時代以前に関しては, 古文書でしか知ることができない。江戸時代後期の古文書には, 武士がサイノカミ行事の時に作製する雪室, 農民が鳥追い行事の時に作製する雪室, 子供の遊び場として作る雪室, 狩猟時に作る雪室が記されている。しかしながら, 出羽国久保田, 六郷や越後国長岡, 塩沢といった限られた地域でしか確認できないため, 三形態の雪室が存在していたかは不明である。その点においては, 昭和初期は広範囲に三形態の雪室の存在をアンケート調査及び聞き取り調査によって広範囲に明らかにすることが可能な時代である。第2次世界大戦後になると三形態の雪室はあまり作られなくなり, 雪穴型のカマクラと呼ばれる雪室が作られるようになった。これは観光資源として利用されている。
- 12) 只見川中, 下流域に位置する小学校に所蔵されている『郷土誌』の職業別戸数の統計表による。
- 13) 外形については図1を参照。
- 14) 本稿で最も有名な「カマクラ」という語を避け, 「雪室」を使用する理由は, カマクラの意味するものが時代や地域によって異なるからである。江戸時代後期において, カマクラは小正月行事を指す行事名である。明治時代秋田県横手では水神祭の中で雪室が作製された。その雪室がカマクラと呼ばれるようになり, カマクラという名称が各地域に広がっていった。昭和時代に入るとブルーノ・タウトが『日本美の再発見』(ブルーノ・タウト著『日本美の再発見』, 岩波書店, 1939, 104~108頁)で横手のカマク

ラを紹介したことにより、全国的に横手のカマクラの名称と外形が知られるようになり、現在では一般に雪室のことをカマクラと呼ぶようになった。しかし、カマクラは秋田県内においても行事内容が違っている。角館では火振りをカマクラと呼び、六郷ではカマクラは竹打ち（町を二分し二手に分かれて竹を打ち合う行事）を意味する。

- 15) 後藤麻衣子「江戸時代後期の雪室 — 長岡と塩沢の雪室を中心として —」, 昭和女子大学文化史研究9, 2005, 34~55頁, とくに51頁。
- 16) 前掲15) 34~55頁。
- 17) 後藤麻衣子「狩猟の雪室の二類型 — 福島県只見川流域と野尻川流域を事例として —」, 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要15, 2006, 45~55頁。
- 18) 間方の鳥追いは戦後、少子化などの影響により廃れたが、2002年に復活した。現在は上と下両方一緒に行われており、上と下で争うこともなく、ドウに登って歌を歌う程度である。
- 19) 隣りの集落との距離は、国土地理院発行の5万分の1地形図から求めた。以下の数値は直線距離であり、道路に沿って測定するとさらに数値は大きくなる。大石田 — 小山までは1.5km, 西方までは2 km, 名入までは

2.5km。川井 — 大登までは1 km, 檜原までは2.5km。間方 — 浅岐までは3 km。古屋敷 — 石神までは750m, 持寄までは2 km。

- 20) 近隣との集落の距離は国土地理院発行の5万分の1地形図から求めた。以下の数値は直線距離であるが、これらの集落は直線に沿って道路が通っているため、道路に沿って測定した距離とほぼ同じ数値である。一王町と安久津の距離, 門前町と寺家町の距離は100~200m。藤と平井の距離は750m。杉山と天屋の距離は750m。田中と大原の距離は250m。西羽賀と東羽賀の距離は500m。
- 21) 降雪累計, 最高積雪の数値は三島町役場所蔵の「三島町雪観測基礎データ」による。観測地は三島町西方, 観測者は飯塚市蔵氏である。昭和初期の統計は現存していない。
- 22) 降雪累計, 最高積雪の数値は高郷村役場所蔵のデータによる。観測地は高郷中学校である。
- 23) 前掲8) ①36頁, 57頁。
- 24) 三島町史編纂委員会編『三島町史』, 1968。
- 25) 前掲8) ①119~121頁。
- 26) 柳津町教育委員会編『柳津町誌下巻』, 1977。
- 27) 鈴木二郎『都市と村落の社会学的研究』世界書院, 1956, 140~146頁, 182~189頁。